

「JMAT兵庫県チームに参加して」

藤原克彦

私は第12班(4月14~16日)に参加しましたが、多数の参加希望者の中から選ばれ感謝しております。とはいうものの現地に行くまでは不安の山積みでした。特に刻々と変わってゆく現地の状況のなかで防寒具と食料品をどれくらい準備すればよいのかを知りたかったのですが、頻りに送られてくるメーリングリストの情報でも持参する物品に関する情報は残念ながら得られませんでした。

しかし石巻に行ってしまうとあとはリーダーの先生の指示に従って行動するだけでよく、不安も解消されました。震災直後に参加された班の方々はゼロの状態から救護所の設定は勿論、参加者の宿泊や食料の確保まで準備され大変なご苦労をされたことと思います。お陰さまで現地での活動は医師、看護師、薬剤師、事務職員などスタッフ間の連携もよく、私にとっては非常に快適に仕事のできる環境でした。避難所では幼い子供の数が少なく、3日間で私が診察した患者さん29名のうち小児はわずか3名で、小児科医の私としましては少し残念でした。しかしわざわざ別の避難所から来られた患者さんのご両親の安心された様子を見て、少しはお役に立てたかもしれないと実感致しました。ただ残念なことに、折角用意されていた小児科用約束処方書の申し送りを受けていなかったため、これらの存在に気付いたのは帰る日の朝でした。今後このようなことがないように、各科別の申し送りノートを用意していただけたらありがたいと思います。

さて今回のJMAT活動がスムーズに行われた一因は、この地区における石巻赤十字病院を中心とした災害医療体制にあったのではないかと思います。同病院長の飯沼一宇先生のお話によれば、石巻医療圏ではかねて三陸沖地震が想定されていたため行政と各医療機関が連携して震災対策会議を何度も開催し、今回の大震災の1か月前に同病院石井正先生が県から災害医療時の統括者であるコーディネーターに任命され、先生が中心になって災害医療を進める構図ができ上がっていたようです。日赤病院自体も数年前に海岸から内陸部に移転し、さらに耐震性構造を備えていたことが幸いしたと聞きました。このように石巻で大災害直後の医療の立ち上げが素早かったのは、日頃からの関係者の方々の努力の賜物であり、学ぶべき点が多いものと感じました。